

思い出の中の花たち

風見洋子

幼い頃の思い出はそんなにリアルに覚えていない。何も考えず、何も感じずに生きていたのか、それとも、その時その時精一杯だったからなのかわからない。

けれど、はっきりと見えてくる光景がある。小学校の裏のクローバーの群れる原っぱ、おばあさんの家のタチアオイ、友人の家の池のそばに咲いていたカラーなど、花たちは思い出の中に鮮やかな色合いで蘇る。

それは、言葉に表せない心のさざめき、とまどい、ときめきなどとともにある。言葉

に表せないいろいろな思いがその花たちと重なる。

退屈という言葉も知らずに戯れていたカタバミの種、さびしいという自覚もなかった

る。幼い日のオシロイバナ、長い歳月色褪せぬ花たちが今も心の中に生きてい